

の元凶ぶりが一躍目立ってくる。BODについては、家庭からの下水、し尿が断然一番である。次いで工場排水、養豚がほぼ同じくらいで合計一万一千トン位と計算される。養豚は窒素、磷酸、BODと全ての項目で万遍なく霞ヶ浦をよこしている。霞ヶ浦はもともと老令の富栄養湖であり汚染に弱いのに、このように多量の窒素分、磷酸、BODが人工的に流入させられているのであるが、霞ヶ浦の富栄養化はますます加速され、湖の寿命は縮められていることになる。ちなみに、約六、六億トンの容積の霞ヶ浦に投入する窒素量を容積二七五億トンの琵琶湖のそれと比較すると実に十倍近いのである。

##### 五、霞ヶ浦をどのように守るか

霞ヶ浦を利用した開発は鹿島、学園都市、水ガメ化、首都圏化など一層急ピッチであるが、霞ヶ浦の環境保全についてはほとんど対策が立てられていないといつてよい。汚水のタレ流しはほとんど野放しの状態に近いことは今まで述べたとおりである。つまり、このような「開発だけが優先してしまつたところに現在の霞ヶ浦の問題がある。自然保護、環境保全を忘れた『開発の論理』に対して早急な転換を迫らないかぎり霞ヶ浦の汚染はとどかないものとなるだろう。それと同時に、霞ヶ浦という昔ながらの環境をとりもどし維持していくためには、『開発』をどのように抑えるか、あるいは、霞ヶ浦という環境が開発にともなうどれだけの汚染量に堪えたいか、という総合的調査を国や県に実施させ、その結果を市民に公開させる必要がある。(すでに官僚的秘密裡に調査はすすめられているかもしれない)科学的で正しい調査が行なわれ、それが市民に公開されていけば、現行の水でうすめて大量に流す式のP P M規制や、特定の産業に対しては暫定基準を設けて規制をゆるめるといふ政治的過保護はできなくなるだろう。当然汚染物質の総量規制をしなくてはならなくなる。又、家庭のし尿、下水についても大規模な処理施設、窒素分や磷酸を除去する新しい装置等を建設しなくてはならない。農業についても地方を弱める一方の化学肥料、農薬万能主義から地方を豊にする堆肥を利用した施肥法、栽培法に転換する必要がある。養豚にしても、河川沿い、湖岸から山地へ移